
夢見子に、花を

火和良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見子に、花を

【Nコード】

N0596I

【作者名】

火和良

【あらすじ】

——ジジイの書斎は、素晴らしい。「俺」は、初めて祖父の書斎に入ってからというもの、毎年誕生日に書斎をねだるようになる。「書斎がなかったら図書館に行けばいいじゃないか」。そんなクラスメイトの言葉にぶちかれた若かりし頃、当時小学4年生だった俺は、怒り狂って反論した。図書館と書斎は全ッ然、別物だ!「どこが違うんだよ!言ってみろよ、書斎って何なんだよ!!!」同級生の言葉に、俺はつぶやいた——上手く言えない。でも、見せることは出来る。大人の「俺」が辿る、ジジイの書斎にまつわる、

最も愛しい記憶の物語。

第一話：ジジイの記憶

思い出せない。

あれはいつ頃のことだったか。

ああ、たしか、まだ目は見えていた。

今のように、眼鏡をかけないと四六時中、水の中にいるような曇った視界ではなくて、

もっと世界がクリアだった頃のこと。そう確か……俺が小学生だった事だ。

その頃はまだ母方の祖父が生きていて、俺は母の実家に遊びに行くたび、

「書斎には入るな！ いいな！ 入るんじゃない！！」

と、顔をつき合わすたびに怒鳴り散らす祖父の目を盗み、

書斎に忍び込んで、家裏の松の木に吊されていた。俺は祖父の書斎が好きだった。

ジジイの小言など、どうでもよろしいわと思うほどに。

まず、書斎らしくない。

カントやプラトンやナツメソウセキがエラッソーにズッラーと並んでいて、

淀みきった空気が重く立ち籠めているような、そこらのジジイの書斎とは訳が違う。

何を隠そう、俺は世紀の書斎ハンターと呼ばれており、地元近所の書斎はだいたい制覇した。

「私は読書家でね」

「書斎がいくつもあるんだけどねえ、もう入り切らないね」

そう困ったように笑う腹の出たジジイの書斎や、自称優等生の本棚はだいたい面白く無い。

忍び込むときに番犬ドーベルマンと死闘をくりひろげても、
辿り着くのは「しょうがくろくねんせい 計算どりる」などの問
題集が延々と並んだ本棚か、
ろくに読まれてもない「死について」「人は何故泣くのか？」
といった、
ふんぞりかえったようなタイトルがホコリをかぶっているだけな
のである。

これが「書斎？」
ちゃんちゃらおかしい。
うちのジジイの書斎をしてみろ。
若かりし俺は、よくそう思ったものだった。

しかし、いやはや、お見せできないのが残念だ。
今の俺は22歳。ジジイは8年前にとうに死に、
独りになったばーちゃんが娘夫婦（つまり俺の家族）と一緒に暮
らすことが決まったとき、
実家を貸し屋に出すことになった。
その際、残念なことにあっけなく、ジジイの書斎は壊されてしま
った。

「この書斎は残してよ！ ジジイも悲しむよ！！」
ただの部屋に戻ってしまう前に、母に投げかけた俺の必死の訴え
は、
「ジジイなんて言うのやめなさい！！ おじいちゃんが悲しむでし
よ！！」
という、いたってどうでもいい倫理の前に霞んでしまったらしい。
この世に、あの書斎はもう無い。

だから俺はこうして、曖昧な記憶を辿りだしたのだ。
ああ、あれはいつ頃のことだったか、と。

はじめてジジイの書斎にもぐりこみ、木に吊るされた日のこと。
木に吊るされても、ものさしでモグラたたきをされても、
もぐりこんだあの、素晴らしい書斎のこと。

「誕生日、何が欲しい？」
と聞かれ

「書斎!!!!!!」
と絶叫した日のこと。

懐かしい、あの頃の話をしよう。
これはその中で、最も鮮やかな記憶。
ジジイの書斎にまつわる、俺の一番好きな記憶である。

t i t l e ——— 夢見子に、花を。

あれは小学校4年生の夏。
昼休みの、ほんの些細な会話から、すべては始まった。
「書斎なんかハンターしなくても、図書館に行けばいいじゃないか」
同じクラスの優等生、ハイバラ君が、そう俺に言ったのである。

俺は心底蔑んだ目で、ハイバラ君を睨み付けた。
「図書館だど？」

「な、なんだよ。書斎のおおきいバージョンじゃないか」

「書斎の、おおきい、バージョン？」

俺は手にしていた牛乳瓶を割れるほど強く、机に叩きつけた。

「全ッ然違うだろ！！！！」

教室のざわめきが止まる。隣の教室さえ、世界さえ、シーンと引いた気がする。好都合だ。

俺は立ち上がり、ハイバラ君を見下ろす。

「図書館は、夢遊病者が行く場所だ」

ポカンと口をあけ、俺を見上げるハイバラくんを追い詰めるように、俺は身を乗り出す。

「図書館にいる奴は、だいたいトロいだろ。」

検索する機械に字を打つのがトロい。

順番待っている奴が、「まだ？」ってのぞきこむのもトロい。

本棚で本を探す動作さえトロい。

そしてパラーツと適当にめくって、だいたいフラーっと帰って行くんだよ。

図書館はダメだ。競争心がない。図書館の本には、「我こそは！」という迫力がない。

図書館は書斎ではない。

情報をぶくぶく喰って喰って喰いすぎただけの、頭がイカれたバケモノ屋敷だ」

フンツと鼻息荒く言い切った俺は、ポカンとしたままのハイバラくんの牛乳を飲み干した。

我を取り戻して眉をハの字にたれさげたハイバラくんは、牛乳の事など気にもとめずに喚く。

「じゃあ書斎って何なんだよ！君の言ってることはナンセンスだよ！」

クラスで最も頭が良かったハイバラくんは、

糸こんにゃくより細い白目の中で、米粒より小さい黒目をバイン
バインさせながら

(目を白黒させながら)

仁王立ちした俺に人差し指を突きつけた。

「言ってみろよ！ 書齋って何なんだよ！！」

クラスの連中が固唾を吞んで、俺の答えを待っていた。
教卓で給食をたべていた担任の先生も、興味津々な目で俺を見て
いる。

生え際の後退が激しい額に、光を輝かせて。
珍しい。今日はカツラが2センチも後ろにずれている。
俺は全員が見守る中、腕を組んで凜々しく言い切った。

「言葉じゃ言えねー。俺バカだもん」

一同は明らかに、頬を吊りあげ、シラけた顔をした。

「なーんだ」

「つまんねー！」

「まあ期待してなかったけど」

「お前の言うことなんかどーせ大した事じゃねーって思ってたよ」

ざわざわざわざわざわざわ。

あっけなく世界は、もとの会話に戻っていく。

俺はむっとして、ぼそりと呟いた。

「見せることは出来るのに」

——あのときほど、俺が注目された瞬間は無かった。
24どころではない瞳が、一斉にこっちを見たのである。不気味

な光景だった。

しかしあの一言。

見せることは、出来る。

その些細な一言から、

あの夏の冒険は始まったのだった。

ued. . .

t o b e c o n t i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0596i/>

夢見子に、花を

2010年10月9日01時23分発行